

# 平成24年度 【 学園研究費助成金< B > 】 研究成果報告書

学部名 文化情報学部

フリガナ フクガ トモ  
氏名 福永 智子

研究期間 平成24年度

研究課題名 フランスに於ける児童の読書環境に関する基礎的研究

## 研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	福永智子	文化情報学部	教授
研究分担者	脇田泰子	文化情報学部	准教授
研究分担者			

## 1. 本研究開始の背景や目的等 (200字~300字程度で記述)

「アニメーション」はフランスの子ども向け読書推進活動として知られている。近年ではさらに、書店と国民教育省の協働による *Prix Goncourt des lycéens* など、文学賞創設と絡めた新しい形態の読書活動も顕著である。少子化対策に成功したフランスでは、読書教育の場として、家庭よりも公教育による活動が重視されてきた。仏社会全体を通じた読書活動の背景や読書推進政策の現状について知ることは、日本の読書推進を考える上で大きな示唆となる。本研究は、フランスの読書推進政策の動向や民間・NPO等の活動や子どもの読書環境の現状を明らかにし、若い世代が読書と親しむことのできる環境づくりについて考察することを目的とする。

## 2. 研究方法等 (300字程度で記述)

以下の3テーマについて、夏から関連文献その他資料の調査方法について検討した。秋以降、関連文献の収集を行なうとともに、入手した資料から読み進めることとした。当初予定していたフランスの読書活動経験者へのインタビューその他については、来年度に実施する予定である。

- (1) アニメーションの概念、および、その幅広く多彩な活動：子どもの読書推進からみた文学賞の設立と、アニメーションとの関わりについても明確にする。
- (2) 近年のフランスの読書推進政策の動向
- (3) フランスの児童文学の成り立ち、および児童書出版とその販売状況、子どもの読書実態と経年的変化、図書館における貸出実績等の基礎データについても調査、確認を行う。

### 3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

以下、家庭読書よりも公教育が重視されるフランスの読書活動の実情について、アニメトウールの果たす役割を中心に、概略報告する。

フランスの小学校は週4日制であり、2ヶ月の夏休みに加えクリスマス休暇など長期休暇が多く、年間授業日数は160日程度である。同日数がおよそ200日程度の日本と比べ、放課後の時間や休暇の時間が多い。子どもたちの過ごす時間は、行政では「学校時間」「学校周辺時間」「学校外時間」に区分される。このうち、「学校時間」以外の時間においては、余暇センター(CLSH・CVL)やアニメーションセンターなどの社会教育の場で、子どもたちが余暇活動を行なっている。余暇活動の特徴は、子どもの預かり保育に加え、2007年以降は学業失敗(échec scolaire)に対応するための学習支援・スポーツ活動・文化活動を行なう教育随伴支援が推進されている点にある。(明石要一ほか著『児童の放課後活動の国際比較』)

子どもの放課後を運営するのは、アソシアションという民間団体であり、そこで働くアニメトウールである。アニメトウールとは、「人々の自由時間に働きかける社会的労働者である」と定義され(G・ブジョルほか著『アニメトウール：フランスの社会教育・生涯学習の担い手たち』)、国家資格が存在し、さまざまな活動のインストラクターとして子どもたちの指導にあたる。

公立図書館においてもアニメトウールによって、読書のアニメーションが実施される。参加者は「学校外時間」に個別にやってくる子どもだけでなく、余暇センターから集団で来る場合もある(D・アラミシエル著『フランスの公共図書館：60のアニメーション』)。図書館と他の社会教育施設との協力でアニメーションが実現する。一般に、アニメトウールには子どもの興味を喚起させる達人が多いという。一例として、パリ読書プランでは、パリ市内のすべての幼稚園と小学校の図書館に、図書館司書ではなくアニメトウールが配置されている。理由は子どもたちに「楽しい」読書を提供することを優先するためである(辻由美『読書教育：フランスの活気ある現場から』)。

### 4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

① 読書環境	② フランス	③ アニメーション	④ 子ども
⑤ 児童文学	⑥ 司書教諭	⑦ 学校図書館	⑧ 読書推進政策

**5. 研究成果及び今後の展望** (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著者名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもの数件を記載。)

今年度は関連文献の収集とその読解に充てられ、報告書や論文を作成する段階まで至らなかった。

次年度中には、現状に即した報告を作成し、紀要等で発表する。具体的には、『日仏図書館情報研究』や『椋山女学園大学研究論集』などを発表の場として想定している。